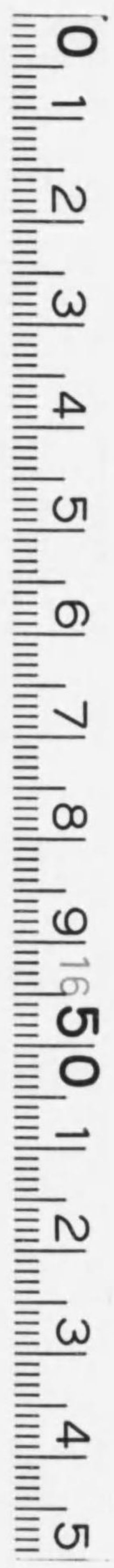


日本橋

3. 特242
5 866



始



特 242
866



日
本
橋





白
葉
集



こたび、店を擴張して一軒置いて北隣へ本店を移しました
これ偏へに御顧客諸君の賜と感謝して居ります。

よつて矢張御得意様の御一人たる、商學士佐古慶三先生に
本書の編纂を願つて茲に發行し、恭しく捧呈します。

昭和四年三月 日

公立社書店 藤 堂 卓

第

號

|| ある時 ||

公立社書店の店頭に立つて、一番端しの書棚を仰ぐ、そして上から下へ、右と左へ眼が漁書的に活動する。

一步、足が店内へ入った！ 二歩！ 三歩！

ズーゾーと横歩みに、奥深くへ——正面の勘定場越しに、氣もちのよい、新鮮味のある光り、禿頭の主人藤堂卓氏が控へてゐる、大抵は二三人知り合ひの御客さんが居て、談笑と紫煙が揚つてゐる。それに交つて、それを過ぎて。向ふ側の書棚に移る。

何時か二三冊の本を引きぬいて自分は持つてゐる。見靈して主人のまごころへ歸り、買った本が店員に包まれてゐる間を待つ。ハトロン紙の、それとわかる角な本の包み、小わきに抱へた、心もちの重量早く歸つて讀みたい一杯の心で、左様ナラ。

(水尾宋斤)

目次

日本橋	大阪の日本橋は公儀橋	一
一目十景	日本橋の眺望	三
三幅三間	昔の橋幅は極く狭い	五
高札	高札の説明	六
髪結床	床と橋との關係	七
先人の明	假橋に防火の用意	八
筋一字	橋詰は橋筋でない	一〇
安井道卜	道卜の經歷にその樂積	一二
長町考	長町の由來と名吳の古名	一四
孫引	孫引は失策の基	一五
名産傘	好箇の傘子場	一八

青	火	千	生	さ	大	雪	竹	琴	二	道	酒
い		日	玉	か	正	月		平	つ	頓	落
灯	屋	寺	心	町	の	花	川	船	井	行	巧
			中	殿	殿				戸	者	者

風引新地に便毒新道……………	一九
古人の道ブラ……………	二〇
井戸の来歴とその址……………	二一
彌次喜多の問答と琴平詣……………	二三
竹田近江の傳記……………	二四
近江の奇禍事件……………	二七
川雲屋ではない……………	二八
阪町の因縁話……………	二九
おさびと嘉平次の相對死……………	三一
法興寺の千日念佛……………	三二
維新以前の千日前……………	三二
千日前に青い灯はつきもの……………	三四

日本橋

佐古慶三



日本橋の花なめが所載

日本橋はお江戸のごよん中にあつた。がわが日本橋はさうでない。寧ろ三郷（大阪の舊稱）の南はづれに架つてゐた。それに大阪は水の都と呼ばれてゐる位、昔も今も四百四橋が自慢なのである。橋の長さから云つてもさう大した代物ではなし高欄擬寶珠があつたとて十指に餘る公儀橋はみな同じく持つてゐた。公儀橋とは幕府がその橋の掛替修復掃除など一切面倒を

見て呉れるのを云ふ。何分橋数が夥しいのでその費用も嵩さばる。従つて町人衆には可成り疝氣の種となつた。わざと橋を高めたり弓なりに曲らしたりして、及ぶ限り人車の往來を避ける工夫も、要はこの橋の掛替修復費の膨脹を恐れるためである。そこで町人の負担を幾分なりとも輕からしめたいと、交通量の多い十二橋を限つて公儀橋となす。曰く

- 鴨野橋 長二十九間一尺・幅二間
- 京橋 長五十間三尺・幅四間
- 野田橋 長十五間五尺・幅三間（類焼以後幅二間）
- 備前島橋 長十五間一尺・幅二間六尺
- 天満橋 長百十五間五尺・幅四間（類焼以後幅三間三尺）
- 天神橋 長百二十二間三尺・幅三間三尺（類焼以後幅三間）
- 難波橋 長百十四間六尺・幅三間半（類焼以後幅三間）
- 高麗橋 長三十六間一尺・幅三間六尺（類焼以後幅二間）
- 本町橋 長二十四間一尺・幅三間六尺（類焼以後幅二間）
- 農人橋 長二十七間・幅二間六尺（類焼以後幅二間）

地方覺書（八田本）

- 長堀橋 長十八間・幅三間四尺（類焼以後幅二間）
- 日本橋 長二十間三尺・幅三間五尺（類焼以後幅二間）

茲に三尺とあつたり六尺とあつたして、半間若しくは一間となさぬのは、京間六尺五寸が一間だつたのに據る。この公儀橋の設定は地子銀（地租に當る）の免除や帳切銀（今の歩一税）の下付と共に、徳川幕府が上方贅六に對する御機嫌取りの方便である。れどこの日本橋は名詮自稱の如く相應評判を賣つてゐた。

一目十景

浪花の梅に

日本橋より東に高津の宮原かき、中院の鉦は耳にひき、眼前には町々の軒をならべ、西の海青き原には帆柱のかざく、四方の山々には春秋をわかち、眼下には小舟行通ふありさま、七芝居のやぐらたいこばうちおさまる御代の賑ひ、南北の遊里はふだん櫻の花くらべ、宿屋に出入の客は四季をかかたず、米市の聲は北を南へうつり氣な、不時の商ひ定めなき世のいさなみ、見るも聞も一心をさめて目を悦ばしむる樂の種ならんかし

とほめそやされるなど外には一寸類がない。さあれ東高臺の高津の宮にしても西川口の出船入船にしても、いくら家並の卑かつた昔とは云へ一寸へだたりがある。寺町の鉦だつてさう大した風情を添ゆるものとは信じられぬ。しかし兎も角も江南を控へてゐるだけ、芝居に色里に行きかふ人の往來は繁しかつた。

南の芝居へは戎橋も人氣者だつたが所詮町橋に過ぎない。翻つて日本橋は公儀橋なのである町橋のやうに人車の往返に神經を尖す要は全然無なかつたし、おまけに堺街道の振出しでもあつた。加ふるに金比羅詣での通ひ船は附近の濱で仕立てる。旅



日本橋よ一景十景

籠屋が榮ゆるのも當然のこと。

日本橋邊 はたごやのしるし 皮舎旅

黄頭赤脚喚ニ征衣

南方遠接ニ墨祠路

賽客多携ニ竹馬一歸

田中金峰

かう書き立てゝ來ると、わが日本橋は、決してお江戸の日本橋にひけ目を感じはせぬ。

幅三間



花の梅所載

しかしこの日本橋も市電が通るまでは随分お粗末なものだつた。わけて公儀橋と威張つてゐた時分は、精々三間幅の木橋に過ぎなかつた。尤も享保の妙智焼に罹かるまでは三間五尺幅だき聞く。これでは現時の尺に直しても漸く四間強しかならない。それで往還に當

つてる上に江南を控へてゐるので、人通りの頻繁なことは言語に絶する。まして昔は橋の上に出し見世や物貰ひが、目白押しに列ぶんだからその雜鬧たるや、とてもお話しにならぬ。橋の袂に高札場があつたのも又髪結床が五つあつたのも、つまりかゝる人寄りの夥しかつたのに基く。

高札

高札とは制札で市人に對し或種の行爲を戒しめるものである。告示機關の不備だつた時代なればこんな制札を、目抜き場所に樹て、行人に注意せしめる。だから日本橋では高札場は南詰の西側にあつた。これ道頓堀に折れる人々が多いのを狙ふ、爲政者の深甚の考慮に出づるのだらう。日本橋では親子札・毒藥札・切支丹札・火事札・火付札・荷物之次第札・駄賃札の都合六つ。七種の高札のうち浦高札だけがなかつた譯である。

親子札は「親子兄弟を始」の書き出しで、人倫の大本を示し

毒藥札は「毒藥並似せ藥種賣買の事」の書き出しで、毒藥偽藥の賣買を禁じ

切支丹札は「きりしたん宗門は累年御禁制たり」の書き出しで、邪宗門を取締り

火事札は「火事出來の時みたりに馳集るへからす」の書き出しで、火事場に於ける心得方を説き

火付札は「火を付る者をしらは早々申出へし」との書き出しで、放火犯の告發を賞し荷物之次第札は「駄賃並人足荷物の次第」の書き出しで、傳馬の作法を明かにし

駄賃札は「大坂より駄賃並人足賃錢」の書き出しで、人馬の駄賃高を掲げる。

大坂では日本橋の外に高麗橋、京橋、天満橋、札之辻、玉造平野口にあつた。いづれも日本橋同様交通の要衝に當り行人の往來繁しい場所である。浦高札は八軒屋、安治川北一丁目、難波島、三軒屋、傳法の五ヶ所で、盡く舟楫の廻着地に限られた。

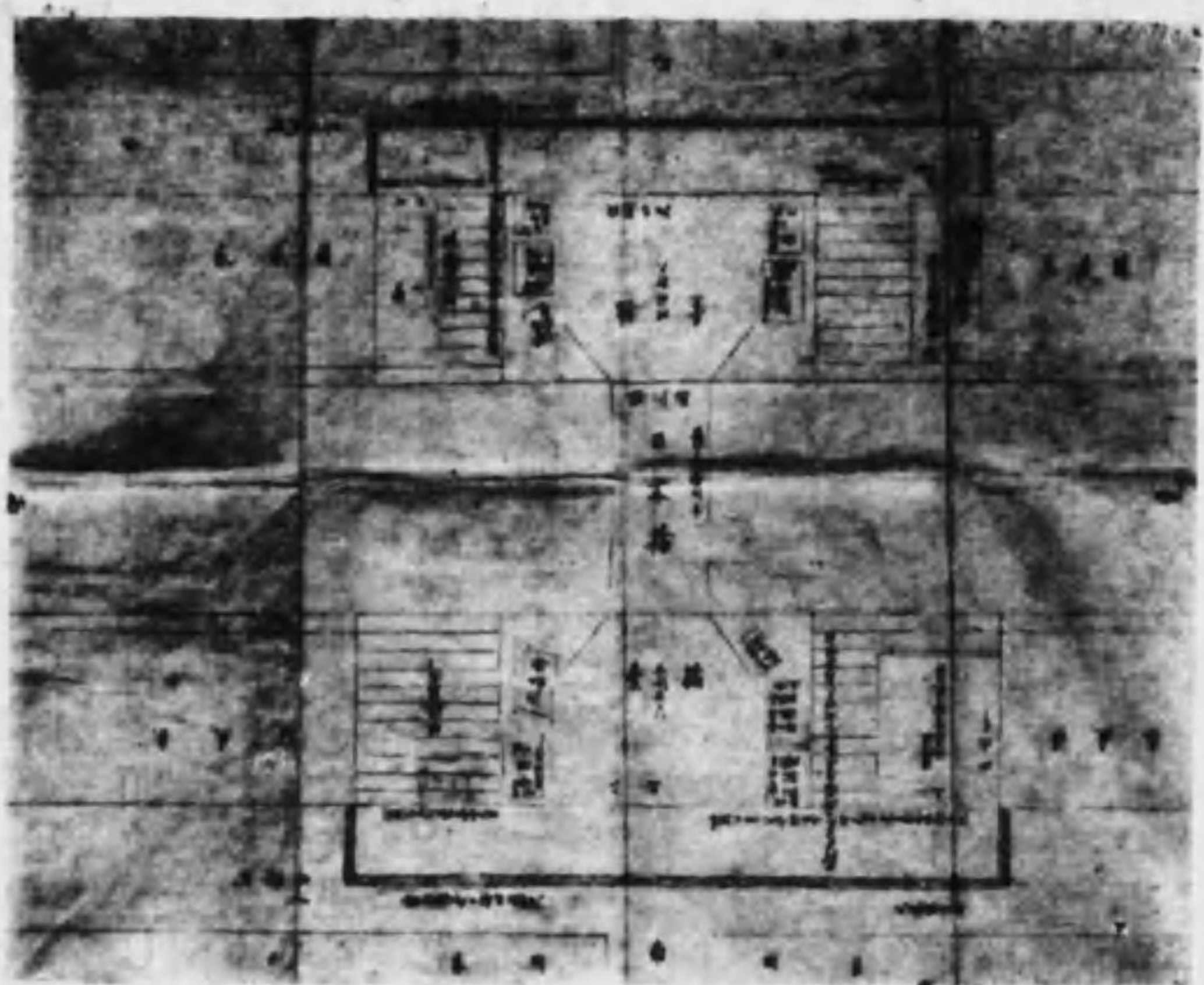
髪結床

髪結床はその昔きつと橋詰にあつたもの。これ今と違つて髪結床がその橋の世話を焼くからである。塵や埃が溜つては橋が腐さる基だと掃除を克明にする。それから車が荷物を

八
積んだまゝ通らない様にと見張はる。また祭禮の地車たんちりに軽車せいかなど重量のあるものが、萬一通つてはと氣を配る。即ち橋の早く損傷するのを豫防するにあつた。そんな事情で舊時は厄介でも車は橋の詰へ來ると、先づ積荷をば下し車は車、積荷は積荷と別々に橋向ふへと運搬し、そこで再び車に荷を積んで曳くと云ふのが慣例である。二人曳が普通だつたのも全く、この積下し積上げの面倒に由來す。日本橋では土地柄髪結床も南詰に三軒、北詰に二軒都合五軒見世を開けてゐた。橋上橋詰の警戒にそれだけ設けて置かぬと手不足を感ずるのだらう。流連の戻りに芝居行の序に、月代を求めて立ち寄る客もあれば五軒あつても結構規則が立つ。

先人の明

日本橋場所惣繪圖を見ても判かる如く、假橋場所の指定がある。せち辛くなつた今日では橋の袂に、そんな餘地を残して置くゆとりがない。だがもとは橋を修理掛替する際を慮かつて、假橋をつくるだけの空地は平素からちやんと用意してゐた。それ故現今のやうに



日本橋場所惣繪圖

くの字なりの挺變な假橋を架けるへまは、古人の夢にも思はなかつたところ。又防火の見地から橋台と地壘との間に、一定の開あきを必らず残して置く（觸寛文四・八）。橋が焼けては水都の住人は避難するのに可成り間違つくし、惹ては人の命にもかゝはることだからそんな心配もしてゐる。おまけに南北双方の詰には兩側ともに火除地を準備する。火事に際して延焼を防ぐためであることは、贅するまでもなからう。現行都市計畫で事新らしく宣傳してゐる防火地帯に防火地区の制は、とつくの昔に古人が先鞭をつけてゐるのであつた。まして火

除地を活用して仮橋の架設場所となす當り、味ふべきものがあらうと思ふ。

現代人は古人を因循姑息だと頭ごなしに冷笑する。がその實古人の方が先きの先まで考へてゐる。火難をば前世の因果だと悟り（片岡博士の所見）切れなかつた彼等は、火難を回避すべく精進に精進を加ふ。放火犯に對する處刑でも自首すれば、その罪科を免じて褒美さへ呉れてやる（觸明曆三・三）。もし放火事故が夜番の油断に基く場合は、下手人ならぬ彼が犯罪を以て問はる（觸明曆三・二）。火を疎かに扱ふ點に至つては却つて今人こそ甚だしい。たゞ人智の開明昭代の惠澤がよく祝融王の弄戯をば封じて呉れてゐるのみ。

筋 一 字

日本橋筋と云ふ町名は勿論この日本橋に出づ。そして明治五年に町名町域の大更改が行はれるまでは、單に日本橋何丁目と稱へ筋が省かれてゐる。筋の一字があつても、なくともどうでもよかりさうなものだが、事實は一寸すぢを立てる必要がある。筋の字がなかつた時代では日本橋一丁目が、すぐ橋の詰から始まつてはゐない。橋詰は全く日本橋のすぢ

と没交渉の他の町で、次の辻からやつと日本橋一丁目が起ると云ふ次第。即ち當時日本橋の北詰は道頓堀宗右衛門町であり、南詰は道頓堀立慶町であつた。これ道頓堀がその開墾者の名を頂くと同様、兩岸に出來た町々が道頓輩下の名を取つたからであらう。

道頓堀大和町道、頓堀宗右衛門町、道頓堀裏御前町、道頓堀久左衛門町、道頓堀立慶町、道頓堀吉左衛門町、道頓堀九郎右衛門町、道頓堀湊町の所謂川八丁を見ても、宗右衛門、久左衛門、立慶、吉左衛門、九郎右衛門などは、すぐ安井出入の人の名だつたことが想像出来る。これを疑ふ人達に次の古記録をお目にかけてたい。

上略私屋敷近邊に掘有之候處より、西の方井路川を木津川まで堀抜度旨奉願、御開届、然とも川堀候人夫は上様方被下候様被仰付候得共、爲御冥加出入の百姓共に爲堀候中略私共出入の百姓宛郎右衛門、吉左衛門、宗右衛門、立慶、久左衛門等え田地御免の儀奉願上、御開届の上御朱印奉頂戴候、且又新に屋敷地面も被下置云々

大坂濫觴書一件

水帳の奥書を搜しても道頓堀裏御前町が延寶に分割されて、道頓堀御前町と道頓堀布袋町とになつた以外は、すつと水帳制定（明曆）以來毫も異動を見ぬ。水帳とは現在の土地臺帳

に相當する公簿である。その記載文字まで信じられないなら兎角の議論は無益だと思ふ。六軒町や字芝居裏に類する稱呼を擔き出して、どうのかうのと詰め寄せられては少々こちらが恐縮する。

かくも安井一家の由緒を傳へてゐた川八丁の町名も、明治の大更改で失くなるものが生じた。その結果日本橋の北詰は長堀橋筋二丁目となり、南詰は日本橋筋一丁目となり、名實ともに橋と町とが合致するやうになつた。

安井道ト

通説に従へば道頓の從弟に道トと云ふのがある。その名を定吉と呼び九兵衛と稱ふ。兄の治兵衛一族の平野藤次郎、同次郎兵衛等と協力し、九兵衛は道頓の遺志を體してこの南堀開鑿の業を畢へた。道頓堀の名は後年松平忠明が城主となるに及び、改稱せしめたものと聞く。

九兵衛はまた忠明が元和偃武のあとを受けて市街整理を試みる際、島之内一圓凡そ四百

五十間四方の地の家建をも命ぜられた。その後も川八町の開發に腐心し、爲政者も彼の仕事をば庇ばつて、遊所及び芝居興行を許してゐる。江南今日の繁榮は全くこの九兵衛の御蔭なのである。安井棧敷の用意も畢竟するにその功績に酬ゆる芝居側の微衷に外ならない。安井棧敷とは西三の棧敷一間をいつの興行でも空けて、安井一門が隨意隨時觀劇出来るやうして置いたのを指す。

代々日本橋北詰北入東側に住し、子孫南組惣年寄の榮職を勤める。邸地は慶長年間の拜領に係り、今その址に道頓道トの紀功碑が樹てられる。碑は時の府尹大久保利武の發起で



安井道札

(大正四) 用材は先年安治川浚渫の砌拾ひ上げし豊太閣築城用の遺石。

一四

長町考

日本橋一丁目乃至同五丁目はその昔、長町一丁目乃至同五丁目と呼んだ。長町は九丁目まであつて一丁目。その東裏も西裏もひとしく在であつた。僅かに北寄りに元伏見坂町(元祿六)西高津新地(延享二)が次第に喰つついて、一丁目にも頭に瘤が作られたのである。

長町の來歴は茲に求めるのが眞實だと信ずる。

長町(舊) 紀州街道筋沿ひに出來し狭長の町、出據町勢 大阪町名考

説をなすものはこれを拒否して名吳の轉訛と頑ばる。攝陽奇觀にも

長町は古名名古の轉語にて和歌の名所也、日本紀雄略天皇の御宇漢織吳織吳國より渡海して、はしめて此浦に着岸す(此邊すべて海也)吳人往來せし道なるゆへ名古の濱名古の浦なとよめり、

那古の海の沙干のかたは遠けれと 目に近かりし淡路島山

公 輔

かゝる古き名を長町とあやまるさへ意恨(遺憾)なるに、また近世寛政七年 公へ訴へ長町五丁目迄を日本橋通と改め漸六丁目より九丁目迄に舊名を残す云々、

しかし名吳の浦をこの邊に當て嵌めるのはどうかと考へる。萬葉以下の歌集に見ゆる名吳の濱は、いつも住よしの名吳の濱邊と出て來る。人丸に「住よしの名吳の濱邊に駒たてゝ玉拾ひしてゆ忘れられず」とある如く、どうも住吉の方に持つて行きたい。よし名吳橋が長町のあたりにあつても、この橋は高津入堀の延長工事(明治三一)で生じた、極く嶮新のものだから証據としては何の役にも立たぬ。大伴の御津でない御津が島之内の一角にひよつくり飛び出すやうに、住よしの名吳でない名吳が、こんなところに湧き出したと看做すのが穩當だらう。だが決して長町の一名を名吳町と呼ばなかつたと云ふのではない。御津同様に名吳町だと時人が信じてゐたことは事實なのだから、それをしも否定し去る街氣は生憎持ち合せがない。

孫 引

一五

孫引ほど讀書子を邪道に墮らしめるものを知らぬ。長町一丁目乃至同五丁目が日本橋一丁目乃至五丁目と改まつたのは、前にも引用した通り攝陽奇觀では寛政七年とある。けれども例の水帳の奥書を見ると寛政四年と載せてある。曰く

當町の儀長町一丁目と唱來候處、此度日本橋一丁目と相改度旨奉願候處、御開届被成下候に付奥書相改奉差上候云々

日本橋一丁目水帳

この寛政四年は攝陽奇觀の編者濱松歌國が十七歳のときである。「十歳の春類焼の厄に遭ふてからの彼の家は、多分一家一門の多くが住んでゐる島之内に移り住んだものと考へられる」なら、つい目と鼻の先に起つたこの町名改稱の年次を履き違へてゐるのは變だ。

次に大阪府全志が「長町の稱はもと其の最北なる一町の唱へ」と論じてゐるが、これも荒唐無稽の説に過ぎぬ。なるほど初發言上候帳面寫を繕けば

一長町 新助町 甚左衛門町 喜左衛門町 毛皮屋町 谷町 尾張坂町 清助町(笠屋町共唱候) 茂助町
右九丁目長町九丁ニ成ル

と正しくある。幸田學士ですら信するに足る記録だと思はれ、大阪市史第五に収録してゐ

られる。しかしこの本に載つてゐる古町名は随分危ぶない。筆者は幾度か(例、古板大坂地圖解説)口の酸くなる位説破した如く、これだけを唯一無二の史料だと決めてかゝるのは輕率の譏を甘受せねばならぬ。三度水帳の奥書を繰つて見るなら

日本橋一丁目(寛政四)	長町一丁目(元禄六)	
日本橋二丁目(寛政四)	長町二丁目(元禄六)	長町新助町(明暦元)
日本橋三丁目(寛政四)	長町三丁目(元禄六)	長町甚左衛門町(明暦元)
日本橋四丁目(寛政四)	長町四丁目(延寶八)	長町嘉右衛門町(明暦元)
日本橋五丁目(寛政四)	長町五丁目(元禄六)	長町毛革屋町(寛文二)
長町六丁目(延寶八)	長町 谷町(明暦元)	
長町七丁目(元禄六)		
長町八丁目(元禄六)	南 笠屋町(明暦元)	
長町九丁目(元禄六)	長町筋茂助町(明暦元)	

とあつて長町はずつと各町の通稱と受取れる。書物をよく究めてこそ書物を眞に活かすこ

とが出来ると、筆者が始終叫ぶのはかゝる失態をお互に回避せんが爲である。

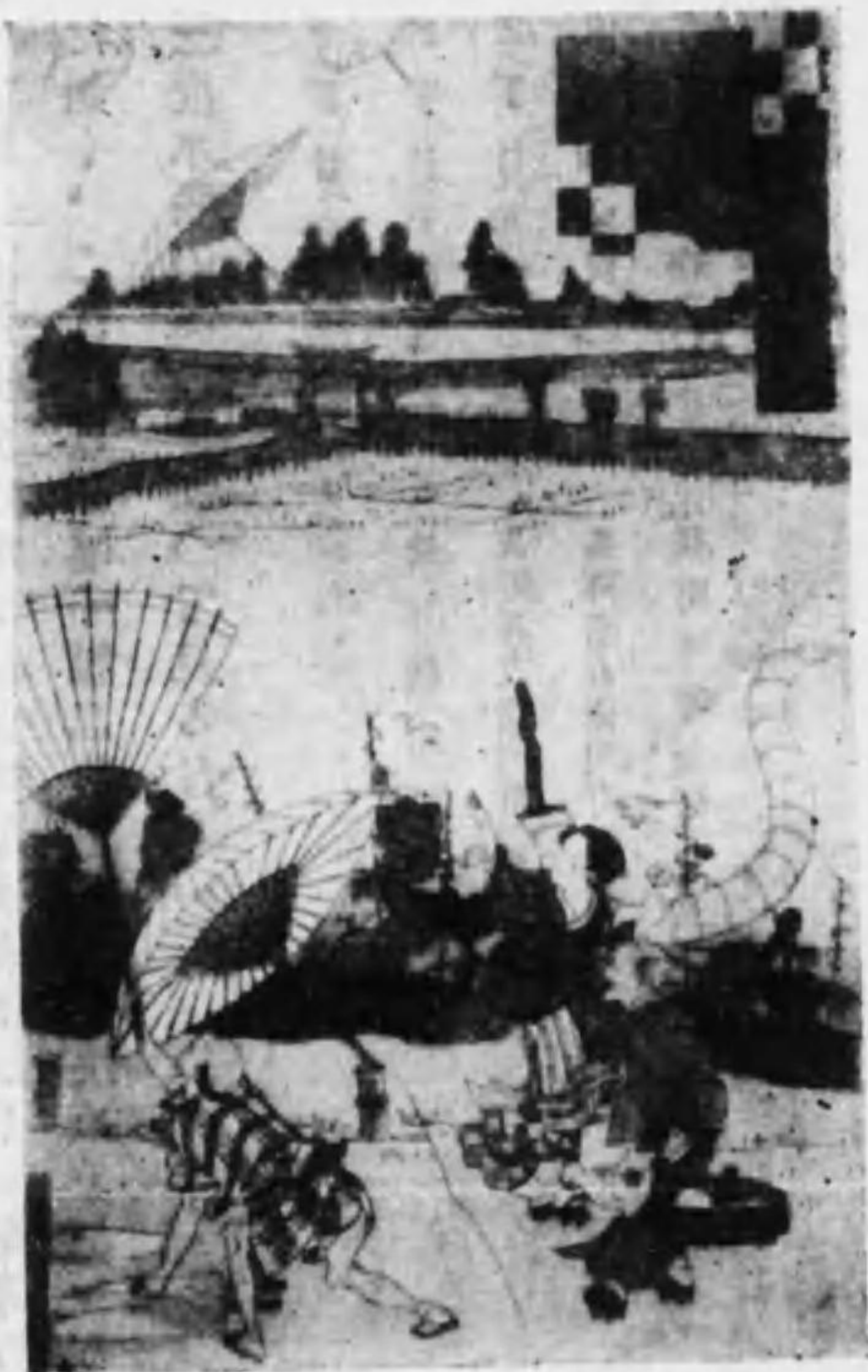
名産傘

長町に店をばり合ふからかさば

たがひに油をしほる世渡り

白緑齋

長町の名産として傘は「諸國の雨風を引受荷こしらへもいとせわし」(浪花名物富貴地座位)いほどよくはけた。値段さへ利口に働けばいつの世だつて、買手が押し寄せるのは必定。そこで裏住の老幼男女は争ふて傘の



長町傘 浪花百景所載

下職で、日々の糧を稼いだものである。さあれ下直一天張で骨をぬすむやうに立ち廻はるのは、不埒千萬な振舞と評さねばならぬ。六十本の御約束を六本かすめて手間に材料を省けば、それだけ安くはあがるだらう。後世並品が五十四本骨となつたそもくの濫觴は茲に基因する。

空が晴れてお天氣がよいと、仕上つた傘をばひろつば一面に干す。傘はすほむれば掌中に握ることが出来るが、干すときには是非開けて置かぬと、折角はつた膏油が乾かない。それにはこの長町がいつち適してゐる。一丁町だから東も西も裏はみな一圓の空地である傘を干すには願つたり叶つたりの千兩場所だつた。

洒落巧者

町に名前をつけるのにむかしの人はとても洒落がうま過ぎる。わけて俗稱と來れば辛辣骨を刺すものがある。例へば風引新地の如き、中之島は山崎の鼻に築地したのだから、ハナからハナをたらしめたのに相違はない。すぐそれを風を引くともつて行くあたり、實に老

練の冴へを見せてゐよう。

日本橋二丁目（現南區日本橋筋一丁目）にあつた便毒でもさうだ。

便毒（俗）

長町二丁目より東、高津新地へ通ふ新道拓かる、恰かも便毒が横に口を開くやうに、出據沿革

續大阪町名考

それに便毒が口を開けばあとが素敵に快くなると聞く。この便毒新道も切賣の魚店だつたが、軒を列らべて繁昌したと傳はつてゐる。みちは私道であつて地主は大和屋某（日本橋一丁目水帳繪圖）。この便毒を長町一丁目に在るとなす攝陽奇觀は、毎度のこと乍ら例によつて例の出鱈目ぶりを遺憾なく發揮する。

道 頓 行

昭和のモボは道ブラを好み、明和の不老は道頓行をはめる。道ブラでは日本橋から西だが、この道頓行はもつと東の二つ井戸に起る。浪華獅子に

君不^レ見松屋町ノ西^フ雙井筒古來名物四方ニ通^ス上ニ有^リ石疊ニ下ニ冷水不^レ知所^レ汲^ル日ニ無^シ窮^リ末粉賣^ル軒無^ク犬ノ聲

剝木納屋冬長^ル風ヲ揚枝家ノ店猿乗^リ馬ニ蘇體圓裏人飼^フ熊ヲ昆布ノ店突濃煎店昆布ハ是縁^リニ濃煎ハ紅ナリ蜜本積^リ來^テ
此ニ繁^ク艇ヲ南北水黒^シ清津橋橋詰ノ紅粉賣^レ箸^ヲ約^シ招牌^ヲ妓^ノ高讀^テ狀^ヲ饒^リ飛脚ノ忠治處餘^シ井^ヲ表具師^ノ穂地玉^ヲ
描湯豆腐ハ皆^ナ呼^ビ二南禪^ト温飽靈^ト是^レ出^ニ砂場^ニ小島多^ク踊^ル鳥家ノ籠河徳ノ登船晝夜^ト遠^ク日本橋ノ側^ニ床^ニ三本松山^ノ鹽^ノ
青柳香^ト此^レ辻^ニ而^テ西家早^ク立^ツ芳澤ノ戯場^ト又新^ク張^ル十文ノ札代惠郎低^一切^ノ仕組無^シ正長^シ豊竹ノ普請^ノ園^ニ未^レ取^ル春吉^ノ
座本濱側方淨瑠璃^ノ傳^ハ誦^未レ^タ聴^カ人形ノ衣裳思^フ外^ニ減^色葉^ノ流^簾日^日汚^レ借^行燈^夜夜^昌ナ^リ日^日夜^夜駕^ア送^リ迎^ヒ中^ハ
有^三蟬^ノ翼^ノ稱^ニ白^人ト^三本^ノ金^銀不^レ重^レ首^重着^ノ東^祖看^輕身^ニ金^銀東^裙尤^モ結^構往^來翻^翻タ^リ中^橋ノ^演
竹^田ノ^唐織^久ク^疑レ^ヒ仙^カト^太夫^ノ甚^吉故^蟬妍^門口^多ク^連ル^三度^笠毎^日看^官田^舎専^ラナ^リ角^之狂^言請^不レ^真立^役ノ^上手^三十^三
郎^西隣^ノ饅^頭號^シ虎^尾ニ^南向^ノ秋^田井^水涼^ナリ^千日^之北^千日^ノ角^足代^舊跡^世ニ^不レ^忘レ^棧敷^附ク^處ロ^小山^屋ヤ^中山^ノ座^ハ並^ニ
森^田ノ^堂ニ^森田^ノ主^人元^替間^狗之^物似^人稱^レス^箱物^似戯^談今^老タ^リ突^筑後^ノ傀^儡近^年當^ル筑^後漸^ク過^キテ^橋筋^ニ到^リレ^バ腹^減
減^錢無^向ニ^夕陽^ニ君^不レ^見開^難波^新地^多シ^茶店^一自^レ是^行テ^休シ^納涼^ノ牀

二 二 つ 井 戸

東横堀川つきて道頓堀川に續くところ、もとの高津五右衛門町の地内に、この二つ井戸が湧く。近邊の用水に過ぎないが珍らしくも二個相ならんでゐるので、かく喧傳されるのである。

月澄や眼鏡の玉の二つ井戸 菊水



二井戸攝津名所圖會所載

寛永の昔地子銀免除されて雀躍した擧句、鑄らへた時鐘（今府廳の樓上に繋る）にはこの水が使はれたと云ふ（大坂三郷町中御取立承傳録）。そんな由緒付の井戸も何分、四つ辻の中央に位してゐたので交通の妨害になる。明治に入つて取り壊されたのは全く惜しいが、これも時勢

でいたしかたがない。今高津郵便局が角にある辻に存してゐたもの。だからどこかの軒先に現にある二つ井戸は、全然後人の偽作である。

郵便局の筋向に……栗おこし屋がある。其店先に井筒が二つ仲長く竝んで、始終奇麗な水を吹きこぼしてゐる掘抜井戸がある。これが二つ井戸

だとは、史實を旨とされる御手前に表と裏とがあることを、自ら告白してゐられはせぬかと問ふて見たい。

琴平船

膝栗毛で名を賣つた彌次郎兵衛北八が、旅の道づれと、「三人打連長町を立出、丸亀の船宿道頓堀の大黒屋といへる掛あんごうを見つけて」ひと問答。

ていじゆ ハイおひこりまへ船賃雑用とも、十八匁づ、でござりますわいな
つれ あんだちふソリヤハアでこたかいもんだのし、ちくさまけさつしやい
ていしゆ イヤ是は定直段でござりますさかい、どなたもさよじやハテたかいもんじやござりませぬわいな、船中

さいふものは日和次第で何日かゝるとも、しれんこともあるさかい

彌次 ハテおめへ定直段といやア如才はあんめへ

で濱を下り讃州金毘羅船の幟を樹てゝゐる船へ乗り込む。これぞ世に琴平船と知られてる便船で、讃岐國は象頭山・琴平さんに詣でる人たちを専ら運ぶ。船形は至つて小さく所謂三十石であつたから、船に弱いものには琴平詣は一の難事である。近畿以東の諸國から夥しい位やつて来る賽者は、一度この大阪に立寄り心身の案配を計り船繰りを考へて渡る。道頓堀の川添ひに琴平宿と俗に呼ばれた旅籠屋は、いづれもこの道者をあてに業を營んでゐたものと聞く。

竹 田

碧眼の紅毛人までかゝまぬ足を無理しても、國許へのお土産に是非見て歸つたのが竹田の機振である。竹田近江の削見にかゝる一種の奇術。二尺三寸の大脇差を二尺五寸の箱のうちらで獨り手に抜かしたり(泰平の御刀)人形の両手に筆を持たして松と櫻との二字を一

時に書かし、その後くはへ筆で梅の字を認めさせる(管丞相の人形)。前者は割鞘の頓智で後者は水應用の奇智なのである。わけてその水からくりの工夫は、たゞ單に舞台の上で看客をあつと言はしたばかりではない。四つ橋邊の挽粉屋に「十八人してする事を一人して」(子孫大黒柱)碓を踏まさせる暗示をも與へた。



竹 田 機 振

かく工夫に巧者であつた近江には、尙永代時計の發明がある
攝陽奇觀に

- 下の台 ケヤキ厚サ五寸斗リ幅二尺五寸斗リ長サ三尺五寸斗リ
- 車ノ輪 大小九ツ有 大ノ輪サマワ
- タシ八尺斗リ小ノ輪三尺斗
- リ其餘各次第あり鐵リ四所
- 但シ大小あり



繪本御伽品鏡所載

右時計惣高サ凡九尺木は惣体ケヤキを以て造り、車のキザツケ也、右九ツの車は自然に巡りて晝夜の時を打事平常の時計に同じ、正中の前に少キ鐘ありて打之、扱九ツの輪の内大の輪の天地に日月の王を金銀を以て分チ、其餘の車は廿八宿、各銀の星を以て其座々々に備へ、輪の巡るに隨ひて春夏秋冬五星の主ル所に顯はれ、冬至夏至彼岸日月の蝕に至る迄委ク、車のまはるに隨ひて晝夜の長短まで具に見

ゆる也、毎朝鎮りの緒をさへ引ケば百歳を經る共毛頭違はず、四季月々日夜の廻り速かに知る、事、誠に萬代の大時計と云々

けれど竹出近江その人の詳傳は今に判然せぬ。知られてゐる限りでは阿波の生れでお江戸の育ち、或る日淺草寺の境内で童子の砂遊びを見てから、ふと砂時計を思ひついたとある

それから京に上つてからくり木偶の完成に努め、下阪したのは寛文二年のこと。享保十一年竹田近江を受領し、同十四年八十一歳で死すと。従つて逆算では慶安二年の出生となり寛文二年は十四歳しかならん。早成だつたとしても甚だ辻褄の合はぬ勘定ではないか。雪月花の趣向で評判は賣つたが、そのため手ひどいお灸をすへられた竹田近江は、この近江でなくて人違ひ。實は竹本座の近江なのであつた。

雪月花

雪月花の趣向とはまづ、お座敷に大火鉢をもち出し炭火を山盛りにごし／＼たき、部屋中を春日の如くあたゝめる。そして少々温まり過ぎる頃合を見計ひ、障子をくると庭一面に雪が降ると云ふ光景。植込みの樹々はすべて綿雪、地上も縁をばら撒きなほ屋根からも盛んにこの縁を散らすのである。

そこで吸物が出るお盃が飛ぶ。下手に座頭が罷かりつん出て、

水の面に照る月なみを数ふれば、今宵ぞ秋は最中にて、げに月々に月を見て、月見の月も無けれども、空さへ渡る月

の色

を一唱。畢つてあとは美形連の繰り込み賑々はしくあつて、花やかな宴となる。

招かれた客人は東の組興力の田中某以下、主人は申すまでもなく竹田近江。その豪遊は市人の度膽を抜き、喧傳されるところとなつたが、驕奢の沙汰だと公儀から熱いお灸を据わられた。時は寶曆十一年の霜月、所は高津新地にあつた近江の下屋敷。趣向役は恐らく當日紅裙供給の、道頓堀は豊島屋と行燈を出してゐた主らしい。

こんな方面に殊に興味を持つてゐた濱松歌國が、その攝陽奇觀にこの一件を、寸言半句も述べてゐないことは全く不思議だ。これでも尙かれ歌國に用意周到があり、萬事に行届くと云ひ得るだらうか。

大正の鰻

砂場の温鈍虎屋の饅頭と一緒に、大正の鰻は贅六の自慢のねたであつた。大正とは屋號で道頓堀街で極品の鰻の蒲焼を賣り出してゐたものである。浪花名物富貴地座位にその味

を禮讃して

和らかみに忘れがたき風情あり、地匂ひにこたへかれる鼻いづまなく、本の兼天狗の芽出しにもなりなるとて、夏の暮道一ト間をせむたり

さあれ大正の鰻も今はその獲んの香だに嗅ぐことが出来ぬ。が出雲屋の大衆向の鰻は大正が昭和になつても、不相變押すなくの繁昌とある。知らず出雲屋の鰻に大正の鰻の味があるかどうかを。

さか町

さかもないのに坂町とは是什麼とくれば一寸藤の公案になる。だが一休和尚だつてこの町の因縁故事來歴を知らないでは、この謎を解くのに可成り閉口するであらう。平地にあるのに伏見坂町（元祿六）から元伏見坂町（元祿十一）となり、南坂町（明治五）と變はつたり東坂町西坂町（同六）に分かれたり、とゞおしまひに阪町（同十六）となつて現在に及ぶのは、よく／＼さかしまな語ではないか。

しかしその町の生ひ立ちを回顧すれば、何にもさかしまな話でないことが明瞭となる。
藤井善八覺書に、

玉造伏見坂町の内北組分、依願道頓堀南裏御代官所御年買地、元禄十五年引地願の通被仰付引越候付、御年買
丁役両様の町に相成、本伏見坂町と改名被仰付候

してもこの玉造伏見坂町は松平忠明の勧誘で、京は伏見から移つて來た八十餘町の一つ
なのである。すれば坂がなくても坂町の名はちつとも不合理ではあるまい。道頓堀に引越
してまあ變はつたと云へば、妓樓が軒をならべる町になつた位だらう。けれどもそれは官
許の廓ではなく、江戸で云ふ岡場所であつた。だがこの大阪では岡場所なんて言葉は決し
て使はずこれをしまと呼んでゐる。事情を何にも知らぬ人々は、わてして大阪の岡場所は
と口をきかれるが、郷土の研究家を以て自ら任せられる御仁に、この言あるを大いに遺憾
とす。坂町は即ちそのしまの一つだつたのだ。

勿論客筋も妓品も劣つてはゐたが、でも「色を隠さぬといふ強み」でてうちんをつらね
て、夜のあくるをしらぬ盛況を呈してゐた。粹人仲間ではこの坂町を俗に坂丁はんていと通がり又

坂亭はんていとも唱へたと傳ふ。

生玉心中

色のつとめの憂きふしの峠をこへて伏見坂、戀のないにもならひとてあたり膚を拍屋の
さがはごうでも濡れものであつた。相手の男茶碗屋嘉平次は、このさがの情の錦手に染付
られて、親兄弟の異見も耳にふたぢやわんどある。たゞかりそめの薄茶ぢやわんも馴染て
は、かはるまいぞやかはるまいと七枚起請かく、わりない仲になつたのである。しかし男
には親の契約らしいさい時からいひ名付、けふ祝言あす祝言とせがまるゝ、おきはといふ妹
がある。

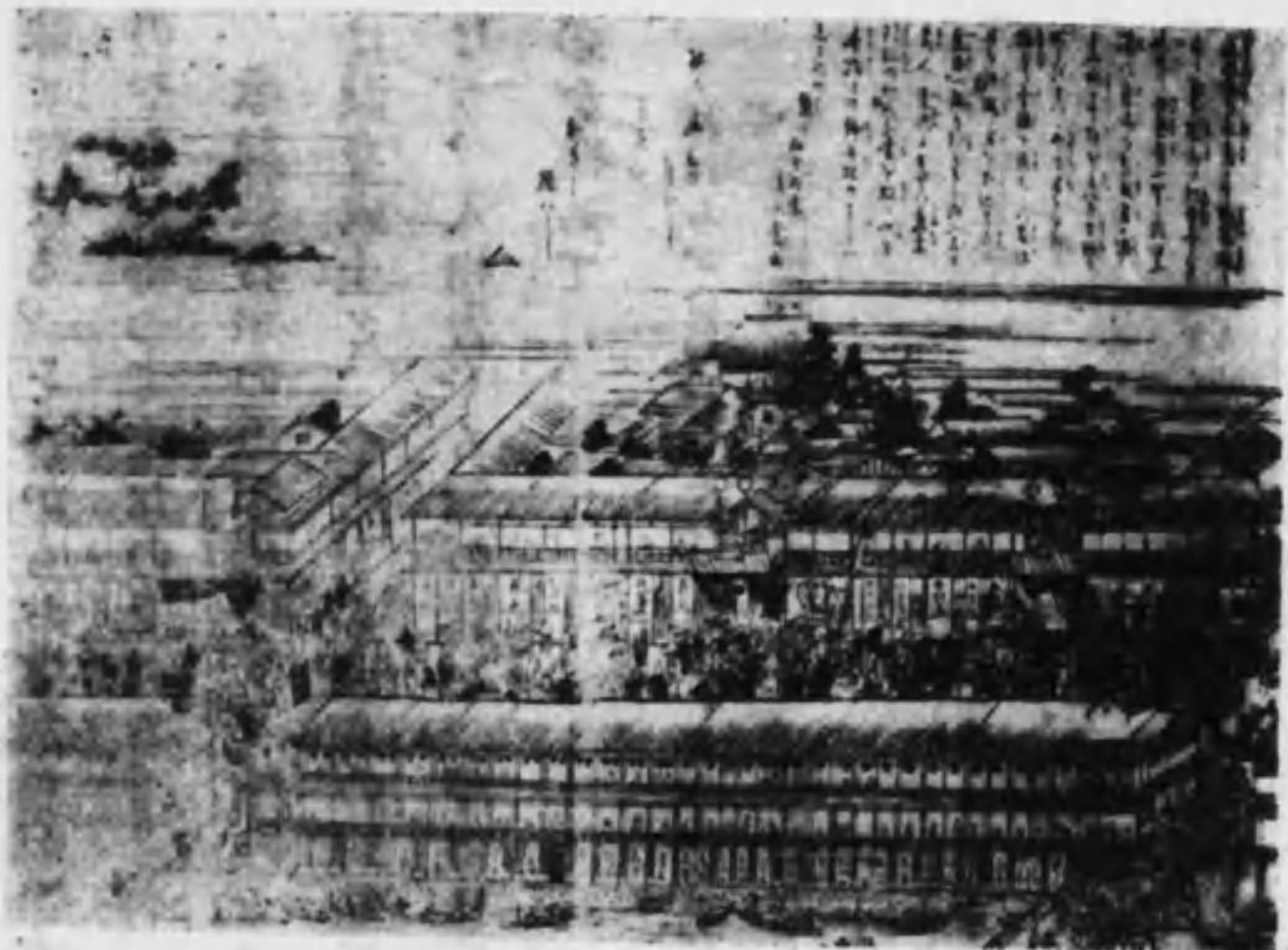
無理な首尾して逢つてゐた嘉平次は色敵の長作にまんまと一杯はめられるし、町内のお
衆からはあんまり世話を焼かせるので嫌やがられる。わけを聞いて下されど断はつても侘て
も断りたゝねばこそ男もたゝぬ。親爺五兵衛は明日の祝言を、無性に強ひてさつさと引き
上げてしまふ。がおきはと添ふ氣を微塵もたぬ嘉平次は、しね〜と來る死に神の誘惑

の手に、せつばつまつた折だからすぐ身をまかせろ。惜しや五日の花高瀬はなのからだを血に染めていく、魂のその行末ぞあはれなれ。巢林子の世話物の一つ生玉心中はこのおさがと嘉平次の相対死を綴つたものなのである。

攝陽奇觀にはこの生玉心中を書き洩らしてゐるが、おりく十兵衛の心中おんやぶりくしんはなむす防紅茺蓮は載せてゐる。作者は奇才並木正三。

千 日 寺

千日寺のたゞき証諸行無情の響ありと云はれた、千日寺は今の法善寺を指すのである。寛永年間より同寺に於て千日の念佛を修行したのに由来す。本尊は阿彌陀如來弘法の作。境内にある子安地藏大菩薩は小野篁の作と傳はる。一説に千日寺を以て竹林寺となすものもある。がそれは何かの勘違であらう。古地誌古地圖のいづれを見ても、大概法善寺をば千日寺、千日堂となす。竹林寺を以て千日寺と考へてゐるのは、やつと攝津名所圖會があるだけ。でもその時代板行された地圖はみな、法善寺、竹林寺とあつて決して法善寺、千日寺と認



道 頓 堀 千 日 前 引 札

めてゐぬ。圖會の挿繪を實寫の如く看做すのは要するに味噌も糞もごつちやにした話である。

火 屋

千日前の俗稱はこの千日寺の前通りであることから生れる。今では市中きつての大衆向歡樂の本場となつてゐるが、維新前は鬼哭啾々たる火屋墓地刑場の地に過ぎなかつた。僅々半世紀のうちにかうも肩摩殺撃の樂土と變はれば又變はつたもの。火屋が設けられたのは松平忠明の市街整理の際である。その時墓地も亦整理されて下町は、すべて下難波村のこの土地に移された界限に千日寺の靈場を控へてゐるので千日の三

味と呼ばれる。それからお處刑場しんせきばが出来長吏ながつたきが居住し、次から次へと物騒なものが、掃き溜のやうに寄つて来たのである。

歌舞妓若衆の道頓堀のすぐ横にこの千日の火屋が位するのだ。一が現身浄土であれば他は滅身成土と、全然うらはらの對立ではないか。陽すでに西山に没して道頓堀に人影疎となり、入相告ぐる鐘の音が一聲毎に夜の帷を濃くする時、この火屋に火葬の煙たちのぼるのを眺めては、

われらが命の程けふのうちもいざ知らず、市のかり屋のまてしはし、獨のこらぬうきよの中終に消へき野路の、いつかは我も此送葬の場に来て、煙ともならんことおもへば今一入心ほそくそ侍る

蘆分船

青い灯

青い灯赤い灯の行進曲はこゝ千日前にも渦を卷く。その昔火屋や墓地からゆらめいてゐたほの青い火は、今や煌々たる青い灯と進化した。白晝をも欺く軒燈にまざつて青、赤、



萬歳繪本御伽品鏡所載

黄と色とりどりの灯は、行人の足を滅法引きよせる。千日前が歡樂境として再生してから、僅々五十の星霜しか閱みしない。でもその有爲轉變の激甚なことは驚嘆に値する。常の家のへらく、松喜の生人形、名物の二輪加、自慢の錦影繪一々數へあげたら涯限がなからう、それがみな恰かも走馬燈の如く、時々刻々と移り變はつて行くのである。

モダンの寵兒はシネマの畫幕とジャズの騒調であると云はる。さあれ近年萬歳が再び甦つて門前市をなしてゐるのは面白い。



千日寺 離波盤所 載

歴史は繰返へすものだであるは、將さにこのことを指すのだ。けれど萬歳そのものには無論時代のころもがかけられてある。

萬物流轉の原則はやつぱり支配してある。

大尾

昭和四年四月十五日印刷
昭和四年四月二十日發行

【三百部限定版】

著作者 佐古慶三

發行者 大阪市南區日本橋筋一丁目三番地 藤堂卓

印刷所 大阪市港區市岡元町一丁目二〇番地 岸本印刷所

不許
複製

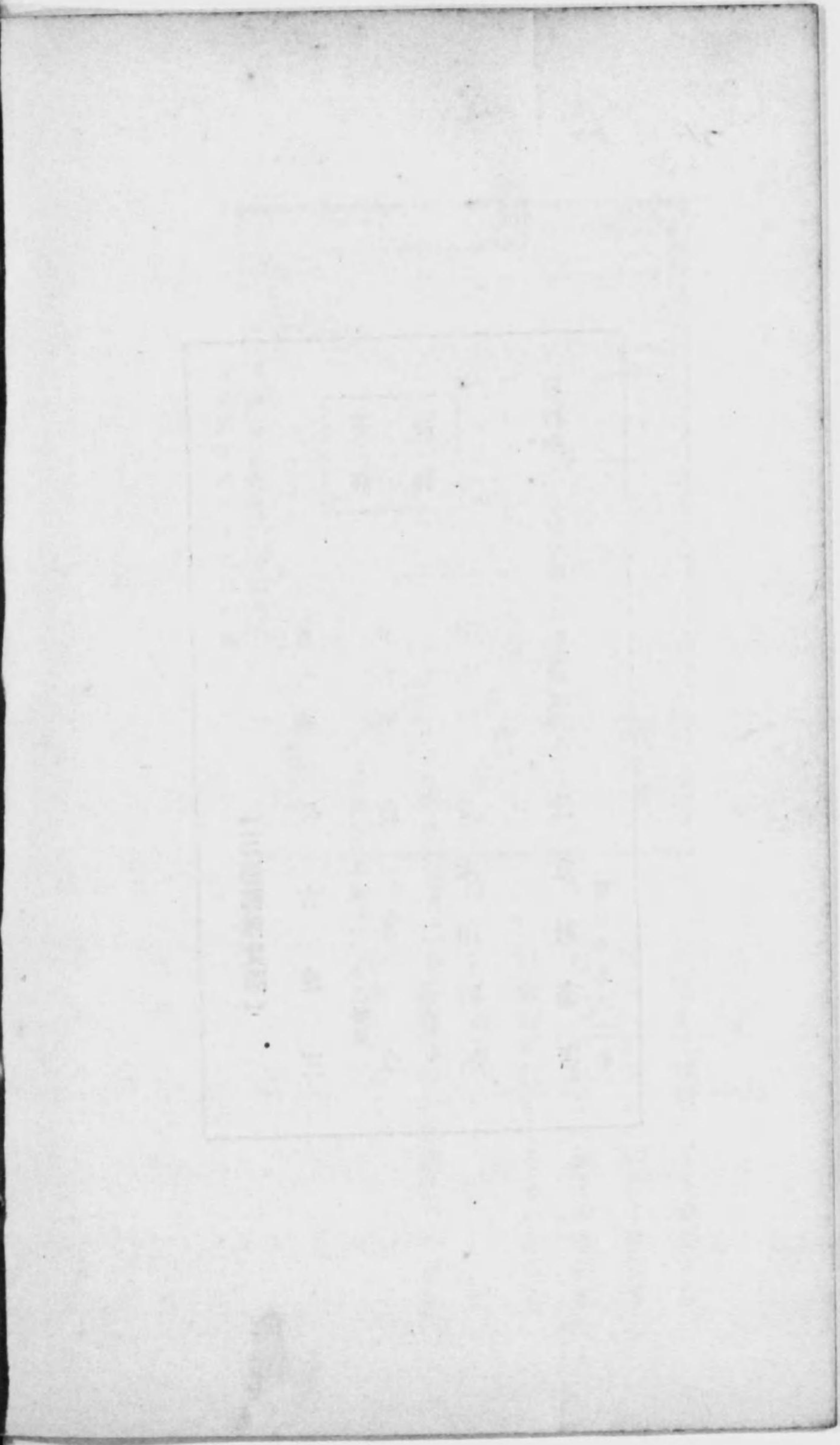
發行所

大阪市南區日本橋筋南入

公立社書店

電話南五六二番

323
56



終

